



J.C. ヘボン

# 国内初の新聞は ヘボン邸での出会いから

## ●「日本国新聞発祥之地」の碑



ジョセフ彦記念会建立。横浜市中区山下町。

1865(慶応元)年、横浜外国人居留地141番で『新聞紙』(後の『海外新聞』)が発行された。民間を対象に独自編集された新聞はこれが日本初である。横浜に入港する英国の郵船や海外の船から新聞を入手し、ニュースを選び、ジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵)が口述和訳し、岸田吟香が編集して整え、本間清雄が版下を書いた。発行部数は100部程度であり、毎号幕府開成所に届け出、許可を得て発行した。

岸田吟香はヘボン博士に眼病治療を受け、ヘボン邸に住み込みで手伝いをしていた。米国籍日本人ジョセフ・ヒコは米国領事館の通訳としてヘボン博士と親交があった。ヒコは「米国には新聞紙というものあり、専ら世間の珍しき事、及び日々の出来事を書き集め、これを世間に公布するなり」と説明し、ここに日本ではじめての新聞が発行された。

なお、これ以前にも幕閣内部資料としてオランダ総督府機関紙を和訳した『官版バタビヤ新聞』という名前の資料があるが、これは現地の官報の翻訳である。

## ●「海外新聞第一号」表紙



創刊年は1864年と1865年と二つの説がある。ジョセフ・ヒコの後年の回顧によると岸田吟香の回顧より1年ほど発行日が早く1864年としている。しかし、ヒコの伝える1864年発行日の新聞ははまだ見つからない。

ヘボン博士のもとでは多くの新聞人が育った。

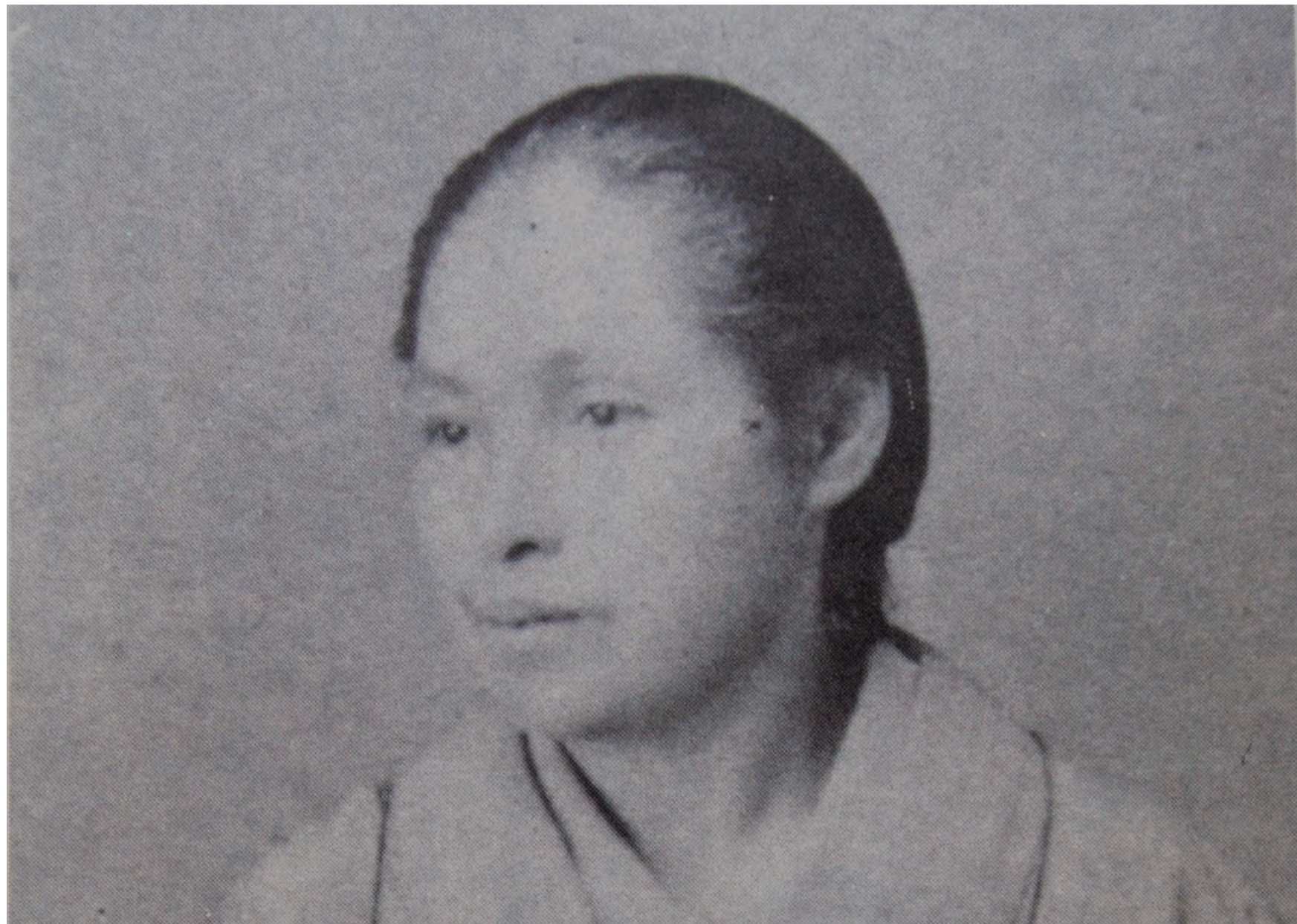
- 益田孝はヘボン塾に学び三井物産の初代社長となり、『日本経済新聞』の前身『中外物価新報』を1867年に創刊した。
- 子安峻は幕府横浜英学所でヘボンに学び、『横浜毎日新聞』の翻訳編集者を経て1874年『読売新聞』を創刊した。
- 星亨は幕府横浜英学所とヘボン夫人に学び、『自由之灯』『めさまし新聞』を発行。村山龍平はこの新聞を合併して号数を継承し『東京朝日新聞』とした。
- 沼間守一は幕府留学生としてヘボンに学び、1879年11月『横浜毎日新聞』を買い取り『東京横浜毎日新聞』として創刊した。



ヘボン夫妻

# 日本最初の女性英語教師 牧野よし (1843-1930)

## ●45歳頃の牧野よし



1888(明治21)年6月撮影。

## ●牧野塾とその塾生



池辺村の牧野塾前にて。

「激動の時代に生きた女性 牧野よし一家とヘボン博士夫妻」より

## ●ヘボン邸



牧野よしも暮らした横浜外国人居留地39番のヘボン邸。1870(明治3)年頃撮影。

牧野よし(旧姓小泉)は13歳で江戸城大奥の腰元となり、行儀作法・文学などの教養を身に着けたが、幕末の混乱で故郷池辺村(現横浜市都筑区池辺町)に戻っていた。1863(文久3)年21歳の時、神奈川奉行所の推薦でヘボン博士に雇用され、横浜外国人居留地39番のヘボン邸に住み込み、家事・看護・治療・製剤などを行いながら、英語を学んだ。

ヘボン夫妻は頭脳明晰で品位がある彼女を「およしさん」と呼んで信頼した。特にヘボン夫人クララは傍から離さず、よしは秘書兼通訳を務めつつ、塾では夫人の代講で英語を教え、夫妻に同行して日光・新潟・佐渡など全国を廻っている。

このヘボン塾での牧野よしの授業が日本人女性英語教師のはじめてであろう。後に外務大臣となり日英同盟を結んだ林董は、ヘボン塾時代に牧野よしに仕込まれた礼儀作法が外国との関係で役に立ったと述懐している。

牧野よしはヘボン夫妻帰国後、1897(明治30)年に池辺村の八所谷戸の道祖神向いに「牧野塾」を開き、30人ほどの生徒に英語と裁縫を教えながら、日曜学校も開いた。



Founded in 1863



H. フォールズ

## 世界初の指紋研究者 フォールズ博士

### ●「指紋研究発祥の地」の碑



ヘンリー・フォールズ博士は、明治学院創設の三ミッションの一つスコットランド一致長老教会の宣教医であり、ヘボン塾から続く築地大学校で教鞭をとりながら、築地病院を開いて施療を行った。

東京都中央区築地の聖路加病院タワー棟前に、フォールズ博士を記念した警察庁建立の「指紋研究発祥の地」の碑がある。ここは築地外国人居留地18番とよばれ、フォールズ博士の居宅跡であり、向いには明治学院の前身東京一致神学校の校舎があった。

博士は日本の犯罪調書作成時に爪印(指印)を押す習慣を知り、友人モースとの大森貝塚発掘時に土器に残る指の跡に着目し、家族や友人・出入りの商人・職人などから指紋を集めた。さらに指紋が一生を通じて変化しないことを確認し、数千人の指紋を比較対象として漢字の部首の分類をヒントに指紋のパターン別の分類方法も案出した。

この結果を「Skin Furrows of the Hand」という論文にして、日本から英国科学雑誌『Nature』に投稿し1880年10月28日号に掲載された。これが世界最初の指紋研究の論文である。

「医療経験を積んだ生物学者として、わたしは自信をもって断言できるようになった。人間の指先に刻まれた溝のパターンは生涯変わることがなく、個人識別の道具として実用に耐えるとの結論に達した」として、犯罪捜査のために指紋を使用することを提言している。

### ●築地居留地浦堀橋付近



橋の左手が東京一致神学校(明治学院神学部の前身)、右手街路樹の向こうがフォールズ邸

### フォールズ博士の功績

- 日本人外科医にリスター法(殺菌・消毒法)を教授/患者のリハビリテーションにハイキングを行う/盲人のために楽善会を設立/大川(隅田川)に監視所を作り溺死を防ぐ/ネズミで遊んだ子供が狂犬病にかかるとその流行の拡大を防ぐ/コレラの蔓延を防ぐ
- 雑誌『The Chrysanthemum(菊)』を明治学院の初期の教師などと創刊し日本研究やキリスト教研究の優れた発表をしている。



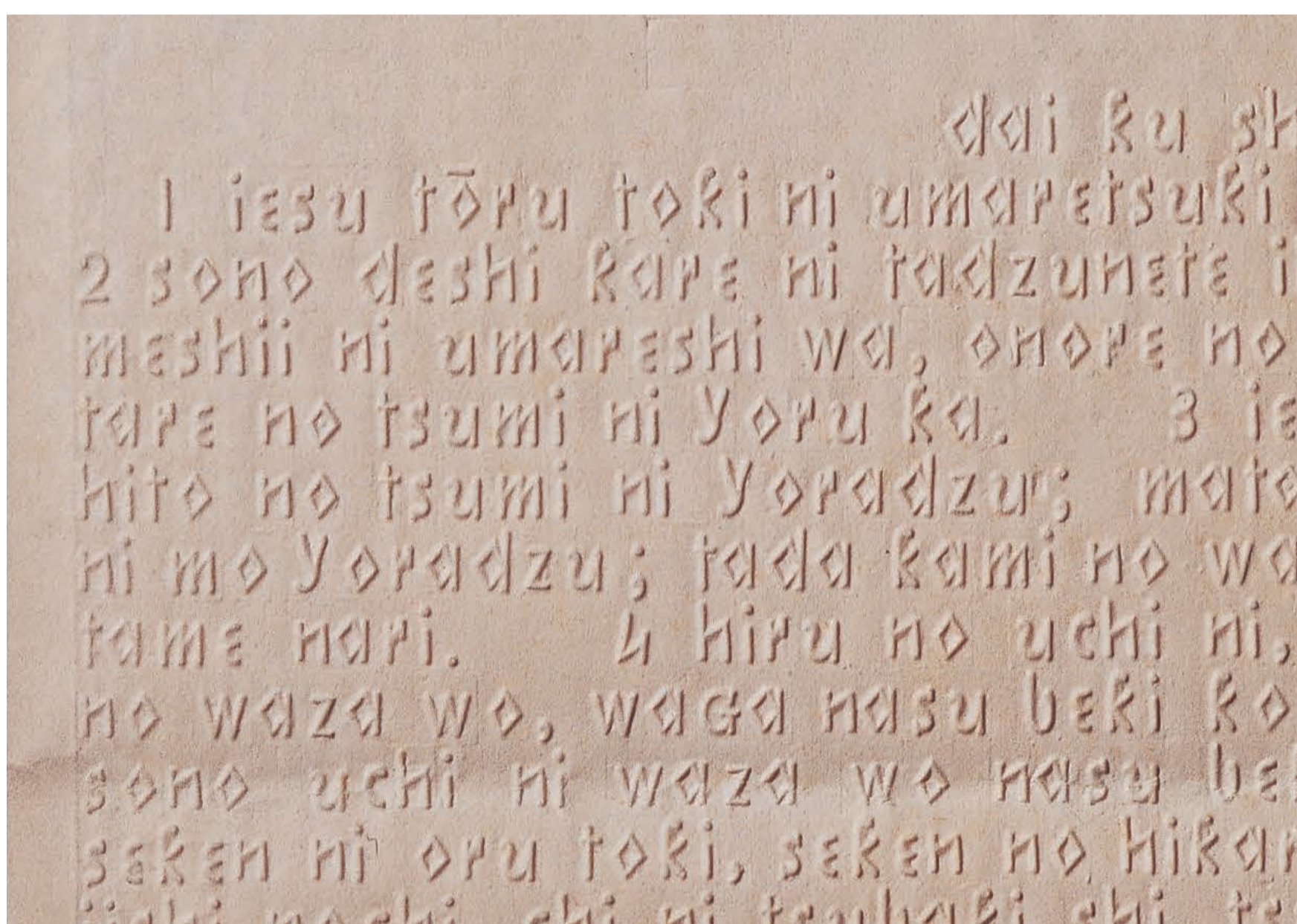
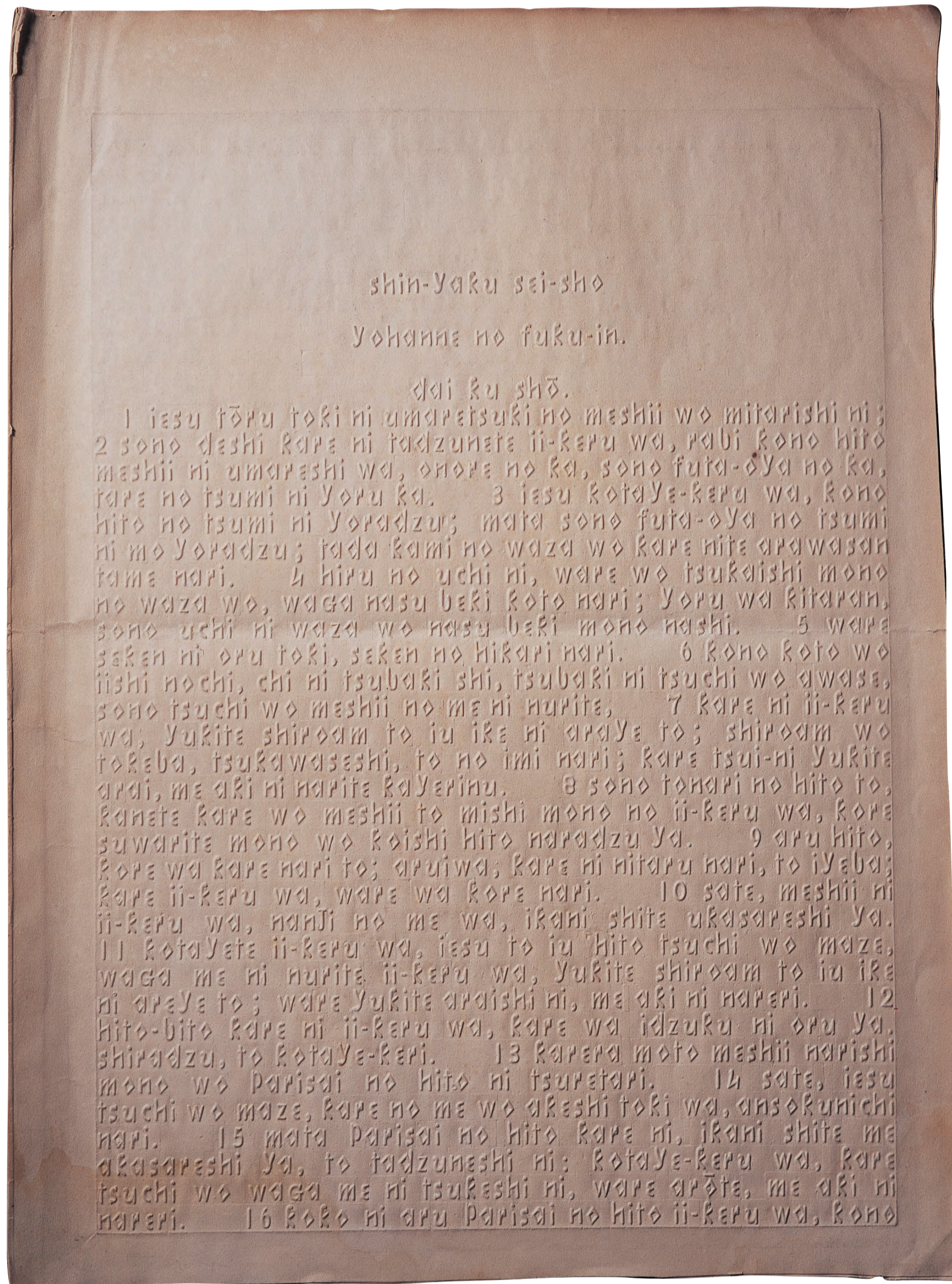
Founded in 1863



H. フォールズ

## 日本最初の 盲人用特殊教育教科書

### ●『新約聖書ヨハネ伝』第9章の凸字本



日本語をローマ字表記にしたのは、アルファベットは文字数が少なく、字の形が分りやすく、音と文字が対照しやすいからである。

筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵

日本において盲人の文字利用の試みのはじめには、1875(明治8)年にヘボン・ブラウン両博士の和訳聖書『新約聖書ヨハネ伝』第9章をヘボン式ローマ字で印刷した凸字本である。大き目の角ばったアルファベット活字を厚紙に強く押し付け、手で触れて読める本である。

明治学院創設の三ミッションの一つスコットランド一致長老教会の宣教医で、ヘボン塾後身の築地大学校教師も務めたヘンリー・フォールズ博士は「日本の盲目者の多きこと、エジプトに2倍し英国に3倍せり」と認識し、ヘボン塾出身の岸田吟香やドイツ人宣教師ボルシャルト、英学者古川正雄、教育者中村正直、農学者で教育者の津田仙を自宅に招き、1875年5月22日盲人のための「楽善会」を設立した。

その事業のはじめがこの凸字本であった。1875年12月、発注先のニューヨークから築地に100冊が到着した。凸字の字体は米国ボストンのパーキンス盲学校設立者のS.G.ハウの作成したボストンタイプで、技術優秀で鮮明な凸字文字であった。また、併せて判読比較のためカタカナ(イロハ)版も製作された。

イロハ式の日本点字は石川倉次が考案し1901(明治34)年に官報で告知されたが、この凸字本は実にその26年前のできごとである。世界ではフランスのブライユがアルファベット6点式点字を考案し1854年公認となるものの、当時はまだ世界でも凸字本による文字認識が主流であった。

「楽善会」は盲人教育学校である訓盲院設置運動を起し、翌年には前島密・小松彰・杉浦襄・山尾庸三らが加入。1876(明治9)年3月東京府権知事楠本正隆から内務郷大久保利通の裁可を得て、「楽善会訓盲院」が成立した。築地3丁目の校舎は敷地面積約100坪、レンガ造二階建て、室内は総漆喰塗りで1879(明治12)年12月に完成し、翌年から授業を開始した。



J.C. ヘボン

## 著作権（出版権） 成立のはじめて

### ●ヘボン館(寄宿舎)



1887年竣工。版權を譲渡した第三版の代金は全額明治学院に寄付された。その寄付金をもとにヘボン館が建てられた。

18世紀からの印刷術の発達により、英国で著作権は「出版権（Copy Right）」として成立していくが、日本では江戸時代に版元の結<sup>ゆい</sup>制度が成立し「重版の禁」が掟となっていた。この掟を超えて公的に幕府がはじめて出版権（著作権）を認めた本がヘボン博士の『和英語林集成』である。

1867（慶應3）年ヘボン博士は『和英語林集成』を横浜とロンドンで発行する。この辞書は現在の価格で1億円以上の資金が投入されたが、海賊版の発行が危惧されたためその資金回収が危ぶまれた。そこで米国公使館書記ポートマンは同年4月外国奉行宛に書簡を送った。

「この辞書は日本のため大裨益をなすべき書なれば（中略）ドクトルヘボルン氏はこの書売りその益を占むる志にあらずといえども、あまたの日本人この書を珍重するより直ちに翻刻に及べる事に至らば、同人第一版の入費をつぐなう事をえず、多大な損失を受くべし」

老中は審議の上、海軍奉行・陸軍奉行・開成所頭取宛に他の版元の翻刻願い出を却下するよう通達した。これが日本初の版權公認である。

この後、明治政府は外国人には版權を認めず江戸幕府の通達は無効となった。そこでヘボン博士は1872（明治5）年の『和英語林集成』の再版出版時、文部省顧問のモルレーに相談すると省内で提議が行なわれたが、著作権や特許権などの知的財産権に対する理解はなく、返答がなかった。

そのため、ヘボン博士は第三版の版權を丸善商社に譲渡し、『和英語林集成』は日本人版權として発刊された。

その後1887（明治20）年12月に版權条例、1899（明治32）年に最初の著作権法が公布される。

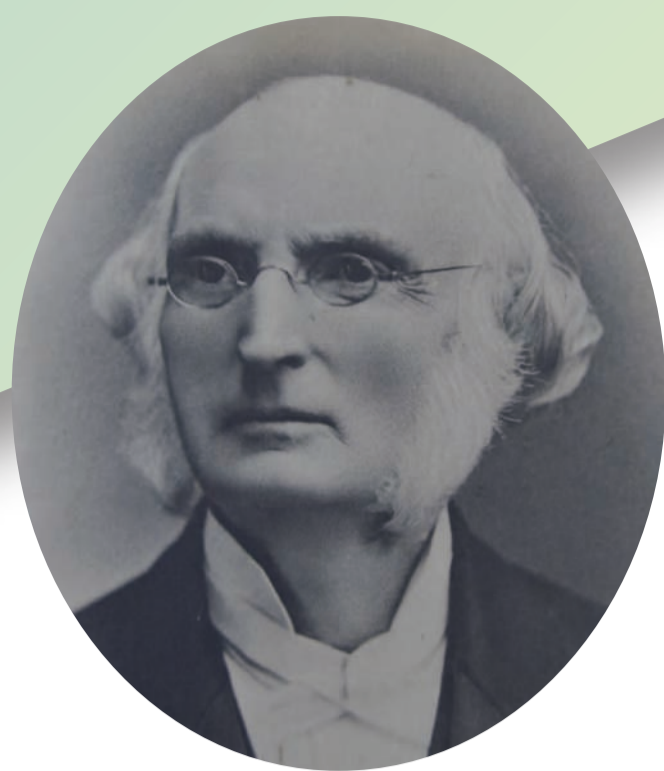
### ●『和英語林集成』各版



右から三番目が第三版。



Founded in 1863



S.R. ブラウン

## はじめての日本語会話書 “Colloquial Japanese”

### ●“Colloquial Japanese”

1863(文久3)年、S.R.ブラウン博士編纂の本格的会話書“Colloquial Japanese”が活版印刷で突然出版された。『口語日本語会話』や『日英会話編』などとも呼ばれる日英対訳の会話書である。

日本語文法解説に始まり、1270の英語例文に日本語での「ていねいな言い方」と「普通の言い方」の2つを対照して示し、7つの場面別の対話事例集、巻末には例文見出しと語彙集が付き、さらには度量衡や貨幣も解説するという他書と比して完成度の高い本である。

文法書も辞書もほとんどない時代に、中国語の知識と西洋言語学の力により極めて体系的に日本語を理解し会話書を作成したブラウン博士の語学解析力には驚かされる。この本は英日対訳編集のため英語教科書としても幕府の横浜洋学所や一橋大学の前身である商法講習所などで使われた。

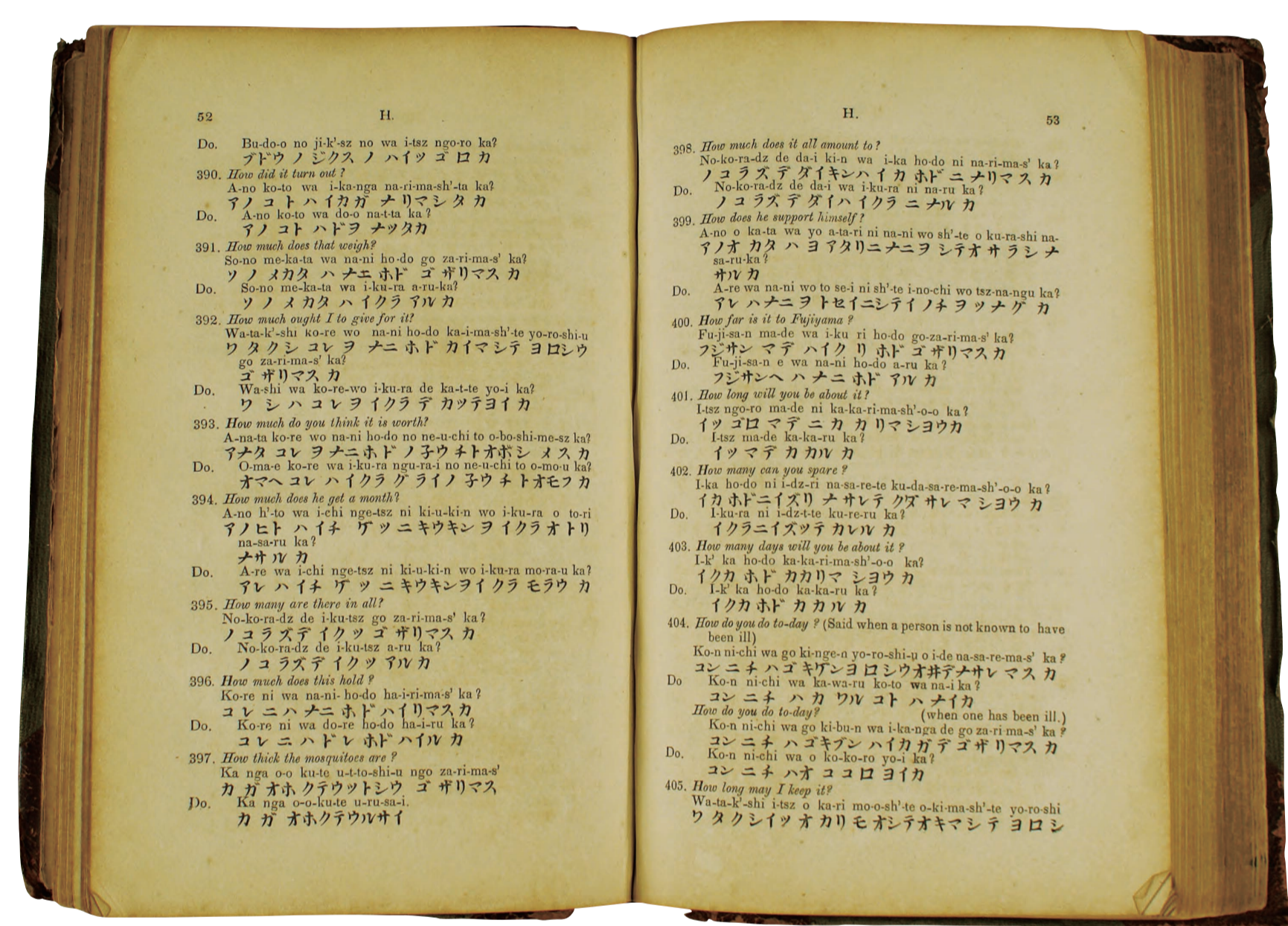
江戸末期から明治にかけて、英和対訳の会話書は数多く出版されたが、多くはメモ書きに近い薄い冊子であった。外国人発行の初の会話書とされる1862(文久2)年のヴァン・リードの『和英商話』(初刷名称『商用会話』)でも木版刷の47丁(94頁)程度であり、ピジン英語(※)の影響もあり、実際は横浜運上所の通詞が書き、ヴァン・リードの名前で販売した可能性もある。

ブラウン博士はヘボン博士と並び明治学院の源流「ブラウン塾」を始めた創始者の1人である。

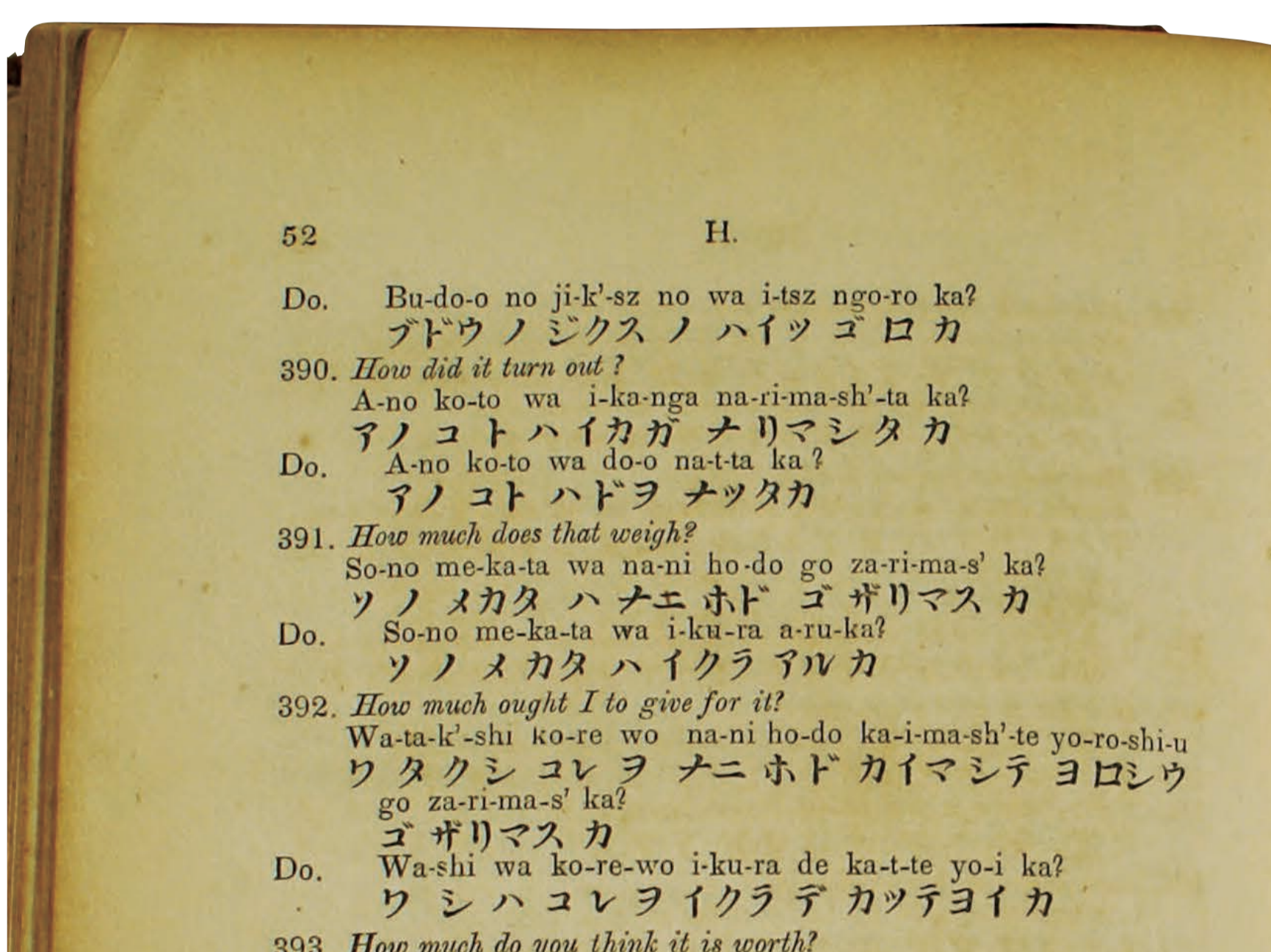
(※)英語と現地の言語が混合した言語



中扉



本文



本文拡大。日本語の例文は上段が「ていねいな言い方」、下段が「普通の言い方」となっている。

本書は明治学院大学図書館のデジタルアーカイブス「先人の輝き」でWEB公開されている。英語と日本語の例文はいま見ても興味はつきない。

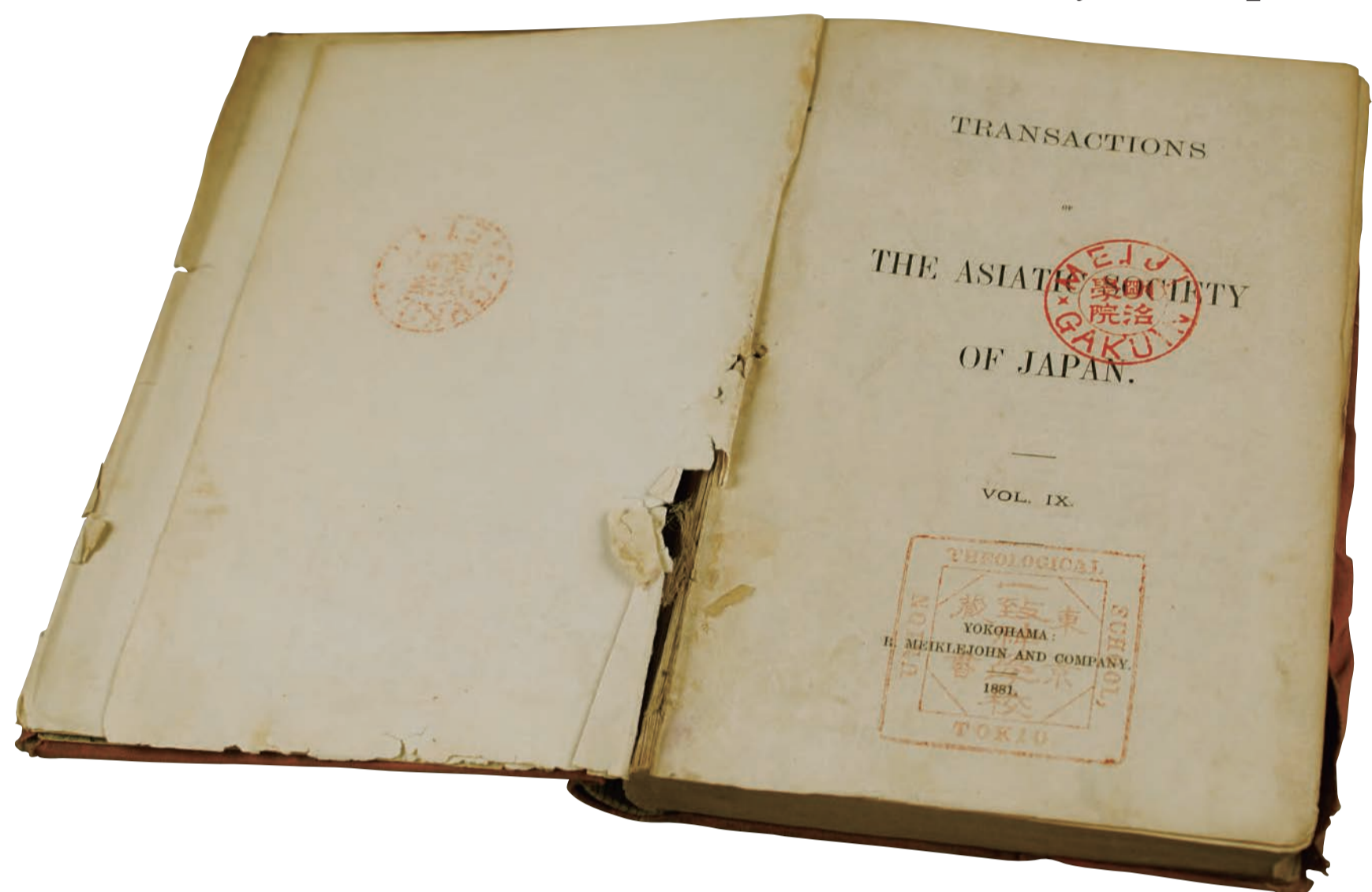
■先人の輝きデジタルアーカイブス  
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/index.html>



J.C. ヘボン

# 横浜初の気象観測と 日本研究学会 Asiatic Society

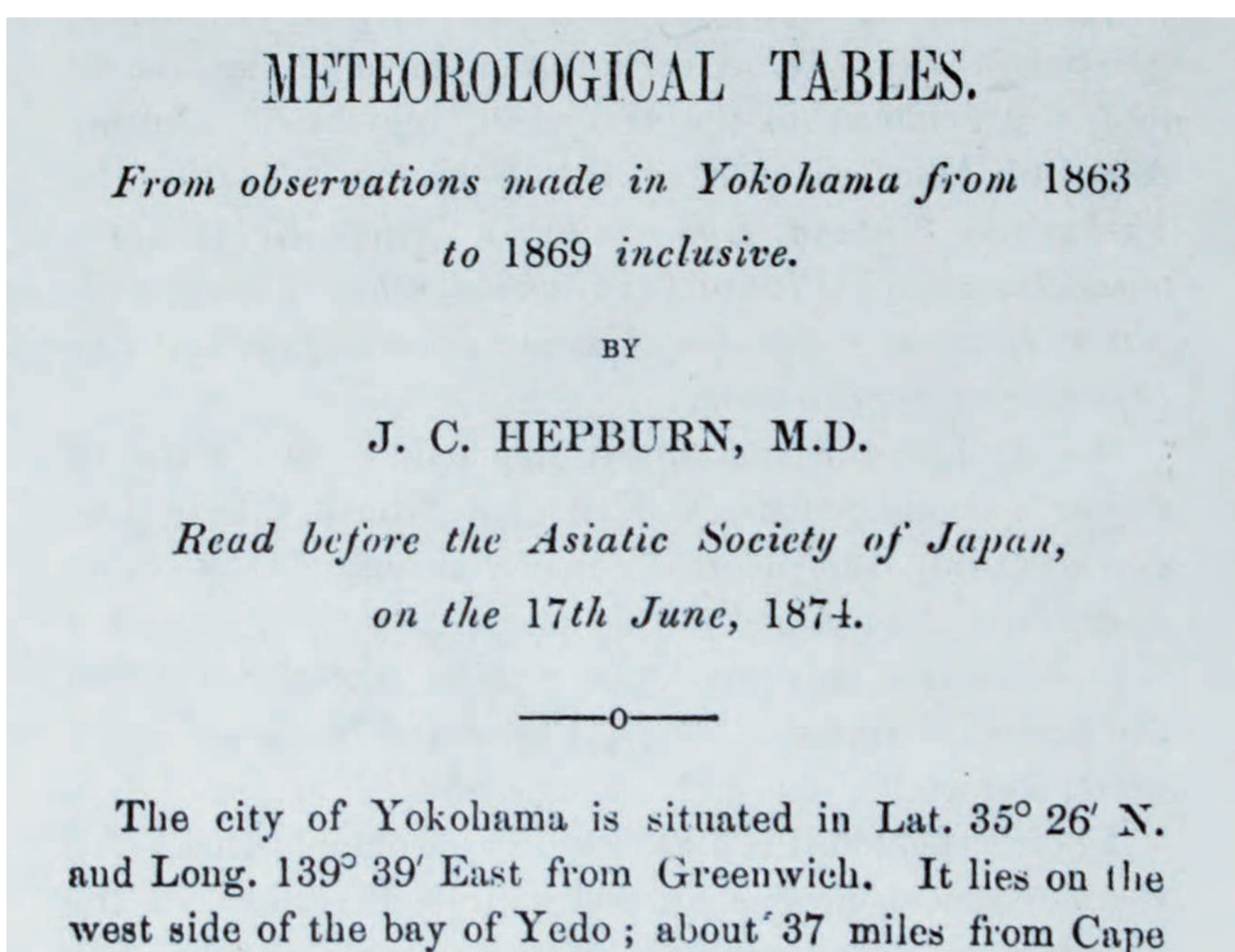
## ●Asiatic Society機関誌 “The Transactions of the Asiatic Society of Japan”



ヘボン博士が1874(明治7)年6月17日にAsiatic Society (日本アジア協会)で「気象観測表」と題する研究発表を行い、機関誌の第2号に投稿した論文が横浜での学術的気象観測のはじめてである。

ヘボン博士はコロンビア大学の委嘱を受けた米国気象学会の会員であり、観測機器を持参し、来日の翌月1859(安政6)年11月から10年以上気象観測を続けた。日の出時と午後2時の気温と雨量を計測して、晴・曇・雨の日数、月別の最高最低気温、平均気温の観測表を作成した。ヘボン博士の几帳面な性格がうかがえる。

## ●機関誌第2号に投稿した気象観測論文 “Meteorological Tables”



この気象観測データを英国海軍が補給のため使用した記録も英国議会議事録に残っている。

この後1872(明治5)年に北海道開拓のための函館気象観測所がはじめて設置され、1875(明治8)年6月には東京気象台が設置されて観測が始まり、1883(明治16)年には天気予報が始まった。

## ●観測データ表 “Monthly and Yearly Average of the Thermometer (1863-1869)”

MONTHLY AND YEARLY AVERAGE OF THE THERMOMETER.													
	JAN.	FEB.	MARCH	APRIL	MAY	JUNE	JULY	AUG.	SEPT.	OCT.	NOV.	DEC.	Yearly Average.
1863	40°12	41°	49°	55°	64°	72°	80°	82°	69°	60°	53°	42°	59°
1864	33°50	38°12	43°28	52°36	64°04	69°14	76°49	79°55	70°44	62°55	52°09	44°30	58°02
1865	39°27	44°48	46°36	58°59	65°43	71°12	73°03	80°19	72°53	61°33	51°22	45°47	59°13
1866	39°46	38°55	48°0	54°33	61°27	65°47	74°15	77°48	68°17	61°56	50°28	42°31	57°01
1867	43°32	39°36	49°46	56°15	64°08	70°57	76°04	80°36	71°47	63°29	51°38	45°56	59°26
1868	42°55	41°26	47°51	57°30	65°46	69°37	77°02	75°33	70°50	60°45	50°29	43°02	58°46
1869	42°54	43°37	46°37	53°49	63°38	69°20	71°26	75°38	73°08	62°41	51°24	41°29	58°08
Average	40°28	41°22	47°03	56°15	64°07	69°44	75°31	78°49	70°48	61°58	52°0	43°45	58°22

THE MONTHLY MAXIMUM AND MINIMUM OF THE THERMOMETER.														
	1863.		1864.		1865.		1866.		1867.		1868.		1869.	
	Max.	Min.	Max.	Min.	Max.	Min.	Max.	Min.	Max.	Min.	Max.	Min.	Max.	Min.
January	54°	29°	58°	20°	62°	25°	57°	23°	59°	29°	56°	28°	64°	28°
February	52°	28°	47°	20°	60°	32°	63°	25°	52°	29°	54°	25°	59°	31°
March	57°	32°	63°	25°	65°	33°	63°	34°	66°	33°	66°	31°	67°	34°
April	72°	44°	71°	40°	74°	48°	73°	42°	73°	38°	77°	40°	66°	39°
May	78°	50°	77°	50°	78°	40°	77°	33°	76°	51°	77°	52°	76°	50°
June	87°	54°	81°	51°	82°	38°	82°	31°	80°	61°	84°	59°	77°	59°
July	90°	67°	89°	70°	86°	64°	86°	57°	88°	61°	87°	66°	84°	62°
August	89°	71°	89°	70°	91°	70°	87°	60°	90°	71°	84°	65°	86°	64°
Sept.	86°	60°	86°	59°	86°	55°	81°	58°	89°	59°	82°	60°	85°	63°
October	71°	50°	76°	47°	77°	45°	72°	48°	79°	40°	73°	45°	73°	52°
November	68°	40°	69°	37°	68°	32°	72°	31°	70°	34°	66°	35°	67°	34°
December	59°	21°	68°	30°	67°	27°	56°	26°	59°	31°	57°	32°	60°	26°

THE FALL OF RAIN IN INCHES.													
	Jan.	Feb.	March	April	May	June	July	Aug.	Sept.	Oct.	Nov.	Dec.	Amount.
1863	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	18.8
1864	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	18.7
1865	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	18.8
1866	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	18.7
1867	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	18.8
1868	1.0	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	18.7
1869	1.1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	18.8

このAsiatic Societyは1872年横浜設立の日本で最も古い「日本研究学会」であり、オールコック/アーネスト・サトウ/ジョサイア・コンドル/バジル・ホール・チェンバレン/ラフカディオ・ハーン/ジョージ・サンソム/ウイリアム・アストン/W.E.グリフィスなど名だたるメンバーで構成され、明治学院からはJ.C.ヘボン/S.R.ブラウン/アウグスト・ライシャワー/駐日大使エドウィン・ライシャワーなどが参加し、日本人では森有礼をはじめ、学者や政府高官が名を連ねている。

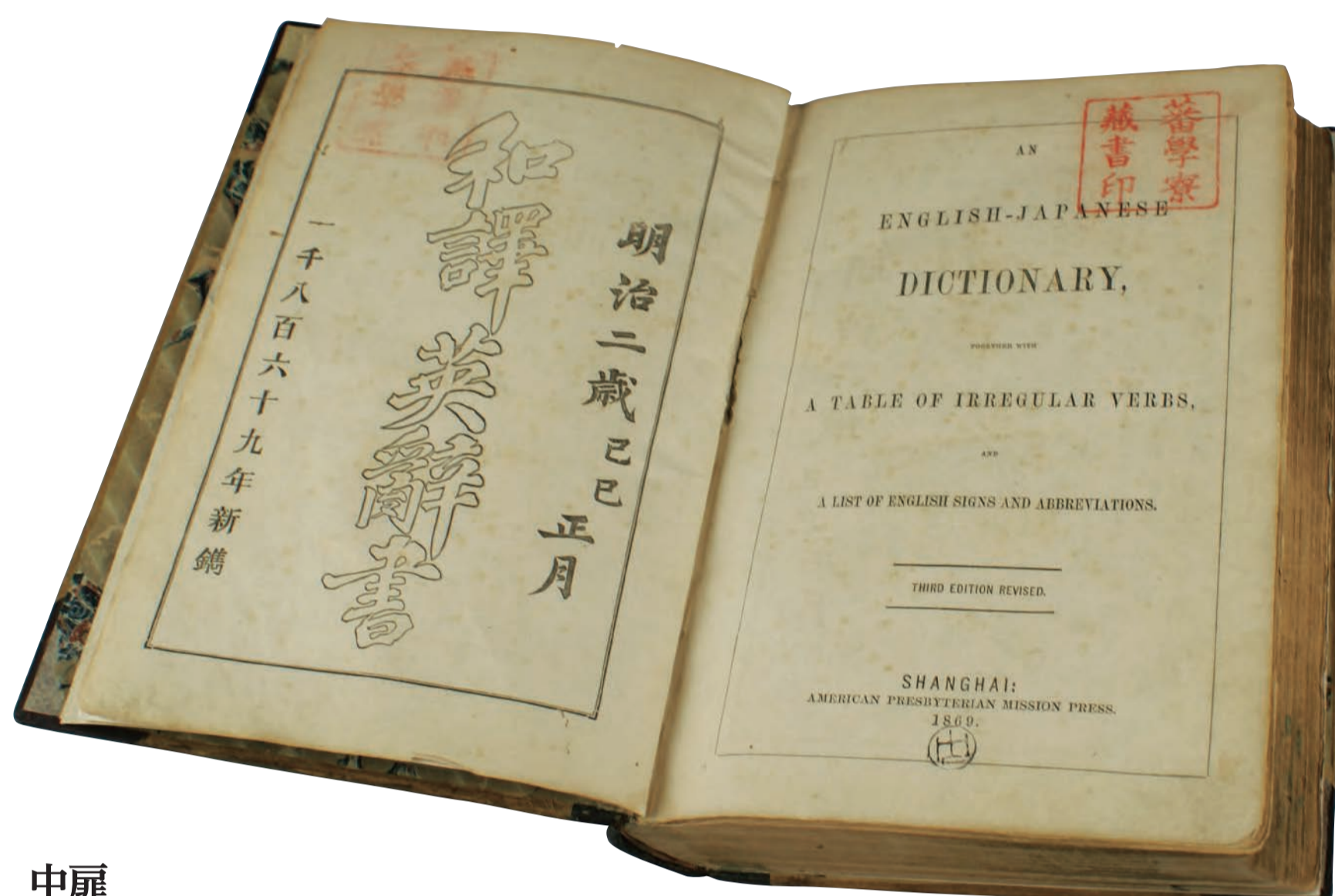
ヘボン博士はこの学会の代表を3回、在日中は横浜支部長を務め、ブラウン博士も代表を1回務めている。



G.F.フルベッキ

# ネイティブの発音をはじめて 記載した英和辞書—薩摩辞書

## ●『和訳英辞書』



中扉

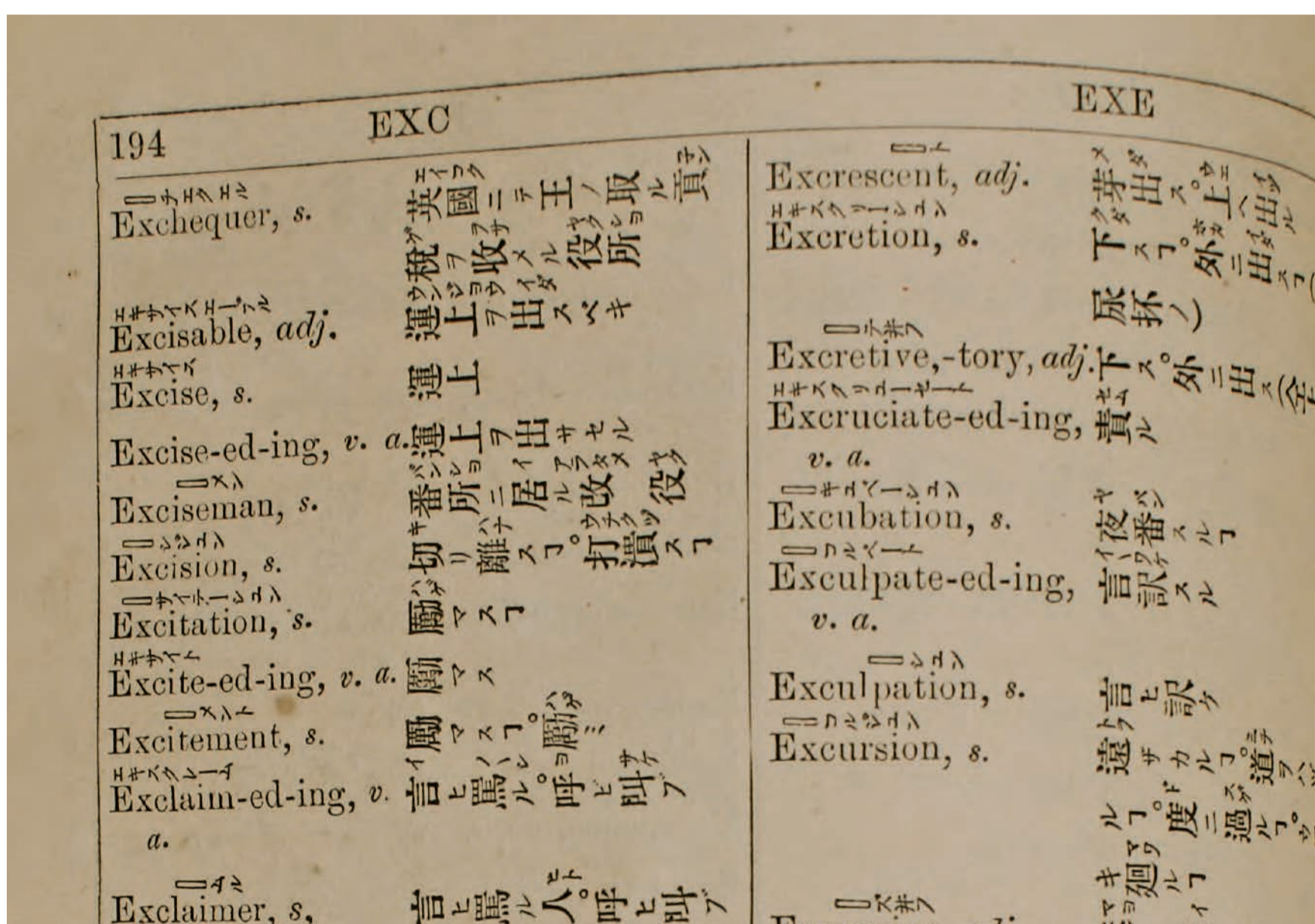
英和辞書の発音表記は、現代ではあたり前の事である。しかし、歴史的にはネイティブスピーカーと出会うまでは、書物だけでは本当の発音はわからなかった。

英和辞典のはじめには1862(文久2)年に幕府洋書調所が発行した『英和对訳袖珍辞書』であり、この辞書はH.ピカードの『英蘭・蘭英ポケット辞書』の英蘭の部を苦勞の末翻訳し英和辞書としたが、発音の表記はされていない。

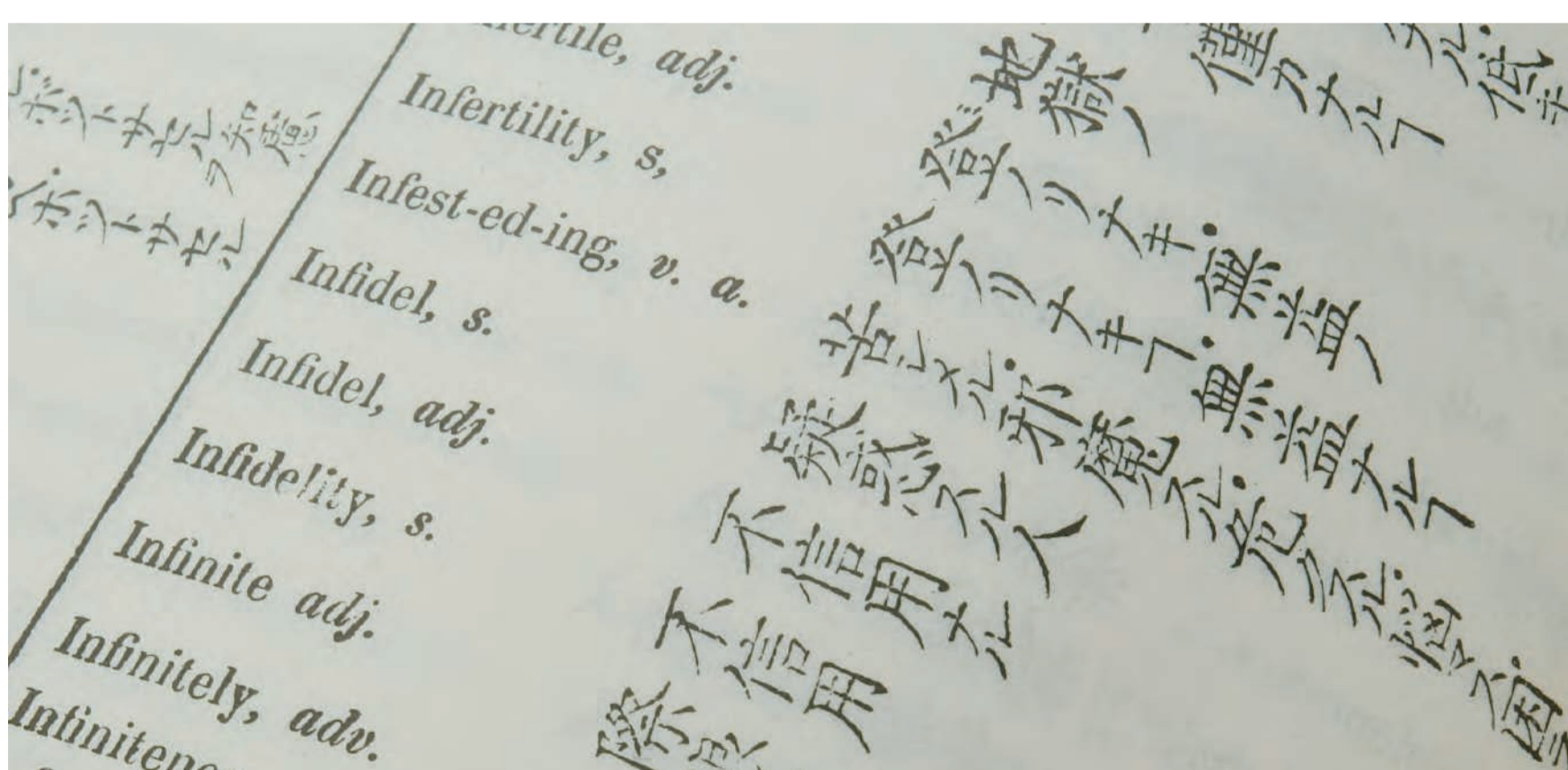
幕府の崩壊とともに宙に浮いたこの有用な『英和对訳袖珍辞書』の復刻が、長崎でG.F.フルベッキのもとで英学を学ぶ薩摩藩留学生の高橋新吉・前田献吉・前田正名によって計画された。フルベッキは明治学院の創設者の一人である。

フルベッキが『和英語林集成』の印刷経験を持つ上海の美華書院に彼らをつなぐと、三人は、『英和对訳袖珍辞書』の改訂版を底本として、フルベッキのもとで学んだ彼の発音を一つひとつカタカナで付け加え、1869(明治2)年に全面活版印刷で『和訳英辞書』として刊行した。『英和对訳袖珍辞書』の第三版という位置づけである。

この辞書は序文で発行者を「薩摩学生」と書いているため、「薩摩辞書」と呼ばれ広く親しまれ利用された。



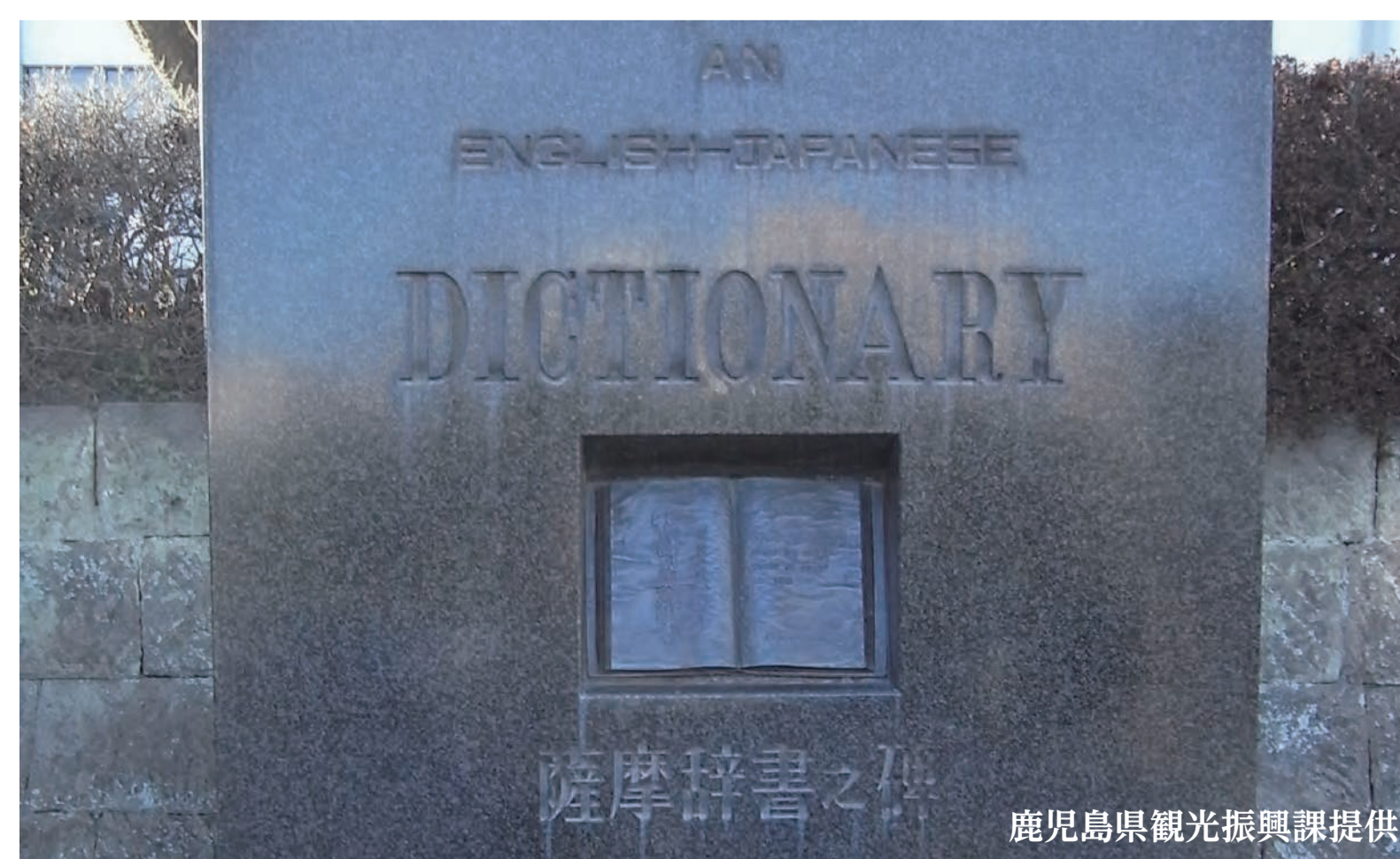
カタカナで発音表記がされている。□は省略記号である。



もととなった『英和对訳袖珍辞書』。日本語発音表記はない。

『和訳英辞書』全ページ画像を明治学院大学図書館  
「『和英語林集成』デジタルアーカイブス」の年表から参照できる。

■『和英語林集成』デジタルアーカイブス 年表  
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/history/>



鹿児島県立図書館入口に建つ「薩摩辞書之碑」





G.F. フルベッキ

# フルベッキの手引きで 蠟型電胎法による活字が製作される

## ●近代活版印刷の父・本木昌造



鎮西大社諏訪神社所蔵

長崎のオランダ通詞・本木昌造は、1855(安政2)年に出島で「活字判摺立所取扱掛」に任じられ、兵書・医学書・会話書などを復刻していた。しかし活字の母型製造が何度試みてもうまくいかなかった。

1869(明治2)年、薩摩藩出身の三人が後に明治学院の創設者となるG.F.フルベッキから伝授された発音を表記した『和訳英辞書』(薩摩辞書)を活字復刻した際、印刷を任せた上海の美華書院から藩命で漢字とアルファベットの活字と手刷印刷機を購入した。しかし日本に運んだものの使いこなせず倉庫保存となった。本木昌造はこれを譲り受け、フルベッキの助言を頼りに工夫して製版と印刷に挑戦したが、やはり使いこなすことが出来なかった。

そこでフルベッキは美華書院の主任印刷技師ウィリアム・ガブルを長崎に招き、最新の活字製造法である「電胎法」と製版術を本木に伝えさせた。

活字の母型(鋳型)は、日本では種字を砂型に押し、グーテンベルクは種字を金属に打ち込んで作成していた。新方式の電胎法は<sup>つげ</sup>柘植の木に彫刻した種字を黒鉛添加の蜜蝋に押し、電気メッキにより母型を作成する。これは画数の多い漢字や小さな文字活字も詳細に多量に製作できる優れた方式であり第二次世界大戦後まで使われた。

本木は1869年、長崎に活版伝習所を作り、美華書院の活字を基本に号数表示の「本木活字」を作り上げ、外国製の活字と組み合わせるようにした。日本で使われている明朝体はこの本木活字が源流の築地明朝体(後に長崎より引継いだ築地活版製造所製)がもとになっている。また5号活字(10.5ポイント)の原型は本木活字による。

## ●蠟型電胎法による活字の製作



1: 柘植の木を彫った種字



2: 種字の組み付け



3: 固めた蜜蝋に種字を押し



4: 金属メッキされた電胎版



5: 電胎版を真鍮に嵌め込み凹型の母型となる



6: 母型に合金を流し込み、活字が完成

写真提供/長崎県印刷工業組合